希望学プロジェクト特別寄稿

『広報かまいし』の原点
―鈴木東民が託した思い

第12回　宇野重規さん

Profile うの・しげき

1967年生。東京大学社会科学研究所准教授。専攻は政治思想史、政治哲学。著書に『デモクラシーを生きる』『政治哲学へ』『トクヴィル　平等と不平等の理論家』など。

広報かまいし』が発刊したのは、昭和30（1955）年のことである。ジャーナリスト出身である、当時の釜石市長鈴木東民の肝いりでスタートしたという。発刊から10年分ほどを読んでみたが、なるほどいわゆる「広報」らしくない。自治体の広報としては珍しいことに、下段には広告がのっている。各種商品の宣伝や、映画館情報などが、華やかな雰囲気をかもし出している。記事についても、市長自らが執筆するエッセイ、地名の由来などの歴史コラム、各種座談会などが目につき、読んでいて飽きさせない。さながら、地域のコミュニティ誌のようだ。一般の市民による誌上座談会には、市民代表の女性たちによる、率直な『広報かまいし』評が出てくる。市民の声欄にも、いろいろな年齢、職業の市民が登場するが、市政からはじまって市民気質に至るまで、率直な意見を展開している。率直すぎて、こんなことまで言ってもいいのかな、という意見まである。

鈴木東民市長自身のエッセイによれば、広報とは、市役所が市民に向けて一方的に情報を伝えるためのものではなく、市民相互の間の「井戸端会議」、「だべりの場」でなければならない。とくに女性や若者の声を取り上げようというのが、彼の意図であった。

鈴木東民というと、戦前にはドイツで特派員生活を送り、ナチス政権と衝突して、日本への帰国を余儀なくされた「気骨あるジャーナリスト」というイメージが強い。戦後も、読売新聞争議のリーダーなど、「闘う人」としての印象がある。

このように書くと、背が高く、外国人を思わせる顔立ちだったという彼の風貌とあわせ、いささか一般の人には近づきがたい

人物を予想させる。しかしながら、広報によせられたエッセイを読んでいくと、そのイメージはちょっと変わってくる。

多いのが動物の話である。白鳥の話、仔熊の話、五葉の鹿や猿の話、馬の話。東京では、同じ岩手県人である宮沢賢治とともに印刷工場で働いたという。子どもや動物の話からは、言論や政治の世界での峻烈な姿とは、別の一面が見て取れる。

意外なのは、「かんにんぐ考」というエッセイ。「（カンニングを）成功させるためには、六分の胆力と四分の機敏さが必要です」などという、迷アドバイス（?）も登場する。他のエッセイには「試験は人間の価値のすべてを決定する基準ではない」などとも述べているように、鈴木東民はどうも試験が苦手だったようである。「わたしのように性格の弱いものが」などという文章も出てくる。祭りでいいところを見せられず、父親に失望されたという、ちょっと悲しいエピソードもある（後で、母親に慰められたという話が続くのだが）。実はちょっとばかり気が弱く、甘えん坊なところもあったのかもしれない。もちろん、これらは鈴木東民の一種の韜晦（とうかい）かもしれない。とはいえ、彼が自分自身を強者というよりも弱者として見なしていたことはたしかなようだ。だからこそ、すでに触れたように、広報などでは、普段、なかなか発言する機会のない人の声こそを、あえて取り上げようとしたのである。

今日ではジャーナリストとしての評価も高い鈴木東民であるが、自分では、書きたいことも書けなかった失敗者という自己評価を下している。もちろん、時の権力の弾圧の結果ではあるにせよ、彼は自分のジャーナリストとしての仕事を評価していない。

そのような鈴木東民は、釜石市長の仕事を、自分の人生の最後の挑戦として捉えた。故郷の土地に、残された自分の情熱を注ごうとしたのである。その際、自分のなかにも流れている、三閉伊一揆の三浦命助以来の、生活を守るためには、自ら立ち上がり、自分たちの力で運命を切り開いて行く人々の血脈を、彼は誇りに感じていた。

鈴木東民は言う。釜石には、製鉄業だけでなく、漁業や林業など、多様な暮らし方の伝統がある。釜石に生きる人々は、困難な時代である今こそ、自らの町のこれまでを振り返り、これからの姿を考えていかなければならない。このような彼の言葉は、今日でもなお新鮮ではなかろうか。

「希望学プロジェクト特別寄稿」は今回で終了し、また新たに「希望学」をテーマにした連載を始めます。お楽しみに。